

# 幼稚園の現場において当面する一、二の問題

萬代彰子

幼稚園教育要領が改訂されてから、幼稚園教育課程の編成とか指導計画の作成など、各地で幼稚園の教育計画が塗りかえられたり、新しく作成されたり大変熱心な研究が進められたことは、幼稚園教育振興七ヵ年計画の一環としてまことに結構なことである。

目標をもち、具体的なねらいを打ち立てて子どもたちの望ましい経験や活動が展開される立派な指導計画が用意されることは当然必要なことである。しかしどのような理想的な諸計画を作成したとしても、その指導の方法があやまっておれば何の効果もない、いや害がある場合も考えられる。これはひとえに指導者の力量にかかっていることを考えると、「人が人を教育する」ということを思いおこす。

幼稚園という集団の中で教育という営みがなされる。そのうち子どもをとりまく環境が子どもを支配する大きい力であることは周知の事実である。なかでも人的動的環境としての子どもたちと教師の果す役割が、物的静的環境よりはるかに大きい影響力をもっていることを知っておきたいと思う。

ここに幼稚園教育がスムーズに効果的に運ばれるために用意であってはならない問題として考えられる一、二の問題をとりあげてみたい。

## 一、生活年齢と学級編成

幼稚園は満三才より就学の始期に達するまでの幼児を教育する学校であることはいうまでもない。従ってどの幼稚園も三才

から五才の子どもを收容するのがたてまえであるのに現状は收容する施設の貧弱さから大部分の幼稚園は就学前一年間を主として收容しているようである。

ここに五才児という同一年齢の子どもの集団ができ、各園の規模や人員の都合で学級編成がなされるのであるが、たまたま学年を異にする年齢の幼児が少数編入された場合は勿論のこと、五才児のみの場合においても、生年月日のひらきの大きのままに学級編成がなされている時に問題がある。

(その一)

本園では三才児を一学級二四名を限度として編成している、生年月日は四月二日から翌年の四月一日に至る十二ヵ月のひらきがある。その間の子どもの発達の速度がいちじるしいのでわずか二、三ヵ月の違いでも大いに子どもの成長の度合いにひらきがあるのは当然である。よって三才児の扱いはおのずから五才児と同様には考えられず、集団指導の方法に考慮をしなければならぬ。あまりに子どものひらきが大きいと、春組、秋組とでもして入園の時期をはずしてはどうかとさえ思う。

しかし三才児といえども入園後二ヵ月もすると何とはなしに幼稚園という集団の中でおのおのがあるがままの力を出して落ちついた行動がとれるようになり、秋頃には二四名という人数

では少ないと思うほどまとまった遊びが展開されるようになる。そして一年の後四才児の新入児との混合の学級編成をするのであるが、その時期と方法に苦勞している。

(その二)

新入の四才児の中に、すでに他園において三才児の保育を経て来たはずのそれらの子どもに限って入園当初に問題があることを発見した。勿論個々の子どもの家庭生活が大きく影響していることであるからたまたまそんな例になったのかもしれないが、何年間かの例で共通して感じられることは、他園で保育を受けた効果が見出せないほど、入園当初にわがままな行動が多いことである。そして基本的な生活習慣が身についていないことが目立つ。まことに悲しいことである。新しい環境にとまどうのは全幼児等しいはずであるから、どこに問題があるのかまことに興味深いものがある。

それは多分その子どもたちは、他に三才児がなく四才児あるいは極端には五才児の集団の中に三才児ひとりが大事にとり扱われ、大目にみすごされ、あまやかされて生活してきたのであるまいか。これらは本当の子どもの欲求が満足されなかったのではないかと思われる。

(その三)

新入四才児と入園第二年目の四才児とを四月のはじめに混成した場合に起った問題は、新入児との中で旧幼児がリーダーシップをとってうまくやれるだろうと考えたのはあさはかなことで、担任教師が新入児に手がかかることにし、とする気持は生まれのおそい子どもほどつよく、旧幼児の方が問題行動をとることが多くなった。しかも二分した場合にはどちらか一方は学級担任も変るといふ二重の問題点が重なりあつて予想もしないことが起つて困つたことがあつた。

そこで一考したことは、新入四才児と旧幼児とは一学期間平行して、担任も変えずそのままにして、その間に少しづつ子どもたちの交流を考え、二学期から発足する学級編成になれさせ、担任もどちらの組へもなれるようにしてまきつをさけるようにした。

学級編成は、生年月日の順に早い方から六ヶ月を規準にしてわけ、しかも新旧幼児はどちらも半数が入るようにした。

正式の学級担任は原則として生まれのおそい子どもたちの学級をつづいて持ち上がることにした。これは、子どもと教師の結びつきが小さい子どもほど関係が深いために担任が変わつたことによる問題をなるべくさけるようにしたためである。

(その四)

生年月日順に学級編成をして気づくことは上半期に生まれた子どもたちのグループがまことに世話がからはず何事もやすやすとはかどるのにくらべて生まれのおそい子どもたちのグループは、まるで動きがぶく目立って幼い感じがするということ。あまりにもはっきり差がみられることは驚くばかり、ここでまた発見したことは、幼い学級に入った子どもたちの中で三才児の時には話すことも少なく小さくなつていたような子どもたちが、思いがけなく活発に話もするし、動きがでてきたこと、これも驚きの一つである。

それは、日々子どもたちが成長してきたという面もあるが、よくみて感じられることは今まで大きい子どもたちに従属していた子どもたちが、それから解放されて自信のある行動がとりやすくなつたと思える点である。

今一つ、大きい子どもたちの学級で、ある子どもが幼稚園がおもしろくないといふこと、母親は大層心配したが、これは三才の時から今まで学級内でいばつていたらしい女の子が、新しいグループになつてから思うように自分の主張が通らなくなつたことによるらしく、こんな愉快なことはないと喜んだことであつた。というのは、新しく入つてきた子どもたちは

もちろんのこと同じような水準に成長している子どもたちは、  
そう簡単にはいいなりにならないのである。

そこに尊い対人関係の経験が生まれたいのである。母親にはよくその理由を説明して大変よい現象であること、大きい意味での成長であることを強調して安心するように話したことがある。これこそ生年月日順に学級編成をした意義がじゅう分認められる諸点である。

#### (その五)

四才児の二学期で決定した学級編成は五才児になってもそのまま同じ担任教師によって受け持たれていくしくみにしていると、いよいよ修了する頃になってもおのずから学級の雰囲気の違い、一面問題がありそうにも考えられるが、それだけにいよいよ子どもたちの成長の度合いの違う混合の学級編成よりも、生活年齢の近い子どもたちによる学級編成の方が、幼稚園から小学校の低学年にかけての集団指導に適したものであるという感じを深くするのである。

この信念を持ったまま一九六六年七月十八日から二十三日まで一週間バリにおいて第十一回O・M・E・P世界会議があるのに出席する機会に欧州の幼児教育施設参観のため約三週間視察出張をさせてもらったところ、ケルン(西ドイツ)ワイ

ン(オーストリア)ローマ(イタリア)などの幼児教育施設では、三才から五才あるいは六才と混成であることが常識のようになっているところをみて、いささか妙な感じであったが、それはその学級の幼児と教師の人員との関係、またその指導方法において考えられることであり、わが国の現状からいって、とてもまねのできる話でないことと痛感したまでである。

しかし根本精神において変りはなく、いずれも子どもの自発性を尊重し、個人に徹した教育、生活に根ざした教育、五官の訓練を大事にとりあげている教育——いわゆるモンテッソリー式教育法の訓練を受けた教師が幼稚園の教師になる——など、まことに徹底してなされていることは大いに意を強くしました、参考とすべきことであった。

## 二、個人化と集団化

幼稚園という集団の中で、子どもたちはどのように成長するかということは、勿論教師の指導力が大きく作用するのであるが、それは子どもたちが自分と大体同じ水準の子どもたちの集団の中に自分の場を見つけたという大事な仕事幼稚園の生命ではないかと思う。

個々の子どもに具わった能力をほんとうに自分のものとして

出しきらせる、自分を自覚し自分を確立しようとする、本当の意味での個性をつくる場が幼稚園というならば、子どもたちは生活圏を広げる冒険をしたい、なんでも自分でやってみたい、知りたい、つくり出したい気持ちでいっぱいである。どんなすばらしい教師の計画があっても、またその計画に従ってほんとは楽しく遊んでいるように見えても、子どもの本来の要求、自分でやってみたいという満足感は得られないような場面に出くわす。それは五才児に多いと思う。

これらは脳の発達を知り、交感神経、副交感神経などの発達や内分泌の状態などをくわしくしらべると、当然解決されそうな問題がたくさんあるように思う。従って子どもの年齢相応な指導の方法としてこの段階においては学級としてまとまった教師の指導のみが多くなり安易な集団化をいそいそではならないように思う。

五才児ともなれば、教師の意図するままに素直に従って、次とすばらしい経験や活動を展開することは楽にできるのである。それらは一見、充実した保育がなされているように錯覚する。この習慣が固定化すればまことに危険とさえ思う。

子どもは与えられる生活に馴れて、自ら求めようとも考えようともしない子どもになりかねない。最近特に幼稚園教育が熱

心にとり扱われ出すにつけその方向をあやまると、その時期をあやまった教育により大事な人間の基礎をつくることにならないのではないかとおそれる。

集団化の前提として自主的な生活、自分で心を働かしていく生活をより多くさせるとというのが教師の指導のあり方ではなからうか。

幼児期教育への関心が高まりその重要さが認められる時代が来たことは、まことに喜ぶべき現象ではある。今まで、三才から五才までの間のことは未開拓の分野であっただけに、最近多くの人がいろいろ研究に着手してこられたことはありがたいことである。

教育学者も心理学者も医学者もこぞって子どもの発達のすべてを明らかにしてもらいたいものである。

しかし心すべきはほんとうに生きた子どもと直接関係の深い現場の教師の素直な子どもを見る目、子どもを知っているその尊い体験こそ大切にしなければならぬと思う。

現実の子どもを正しくつかむことに自信を持たなければならぬ。そのためには学者の研究に耳をかたむけることも大切なのである。

### 三、子どもの心の五つのねがい

今一つ大事なことは、正しく子どもを知る方法、子どもの成長発達のあり方を、母親に知ってもらわなければならないことである。自然な姿であれば当然伸びるはずのものが、母親も教師もそれをそこねる方向にあやまった教育熱心という邪魔ものがあることである。

子どもは本来のねがいが満足されないと、どのような手だてをしても素直には成長しないものである。問題のある子どもは必ずといってよい欲求不満である。

三才から五才までの子どもたちが幼稚園という集団の中で成長するうえに根本になるのはこの基本的要求は何か、それがどのような形になってあらわれているかを正しく見つけだす仕事  
が第一であると思う。

学者によっていろいろその基本的要求の分類が違ふかと思ふが、①新しい経験をしたい、②成功したい、③仲間がほしい、④愛されたい、⑤理解されたい、などの五つはもっとも適切なわけ方であると思う。

なかでも④愛されたい、⑤理解されたいという要求が満足されない時におこる現象はおそろしいものである。すべての問題はこれによって解決できそうである。

子どもをみれば親がわかり、親をみれば子どもがわかる。これは過言でない事実である。

両親の不和、愛情の欠乏、情緒の不安定は将来とも学業不振につらなる根本問題である。どんなに素質があつても子どもにとつてこれほどの不幸はない。それに気づかず子どもに要求する方向を間違っている両親、あるいは教師が多いのではなからうか。

幼児期をあくおとす責任はまことに重大である。世の中で正しく独立させる、世の中で正しく仲間入りさせるべく、心と身体の健康にじゅう分気をつけなければならない。それは集団の中で安定して自信がもてる生活をいとませることににより成功するのである。

ここに、幼稚園教育の在り方から当面する問題、一、生活年齢と学級編成 二、個人化と集団化 三、子どもの心の五つの願いのそれぞれが必ずしも別々の問題でなく、みんなかわりあいを持って考えられなければならないこと、それらはすべて無関心であつてはならない大事なことであることを、声を大きくして提唱したいと思う。